

セラムック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No. 31

編集 1995.3.31
発行 佐賀県立九州陶磁文化館
代表者 山田 陸 三
〒844 佐賀県西松浦郡有
田町中部乙3100-1
TEL 0955-43-3681
FAX 0955-43-3324
印刷所 山口印刷株式会社



そめつけれん ち すいきんもんりん か おおざら
染付蓮池水禽文輪花大皿 館蔵資料

中国・景德鎮窯

16世紀末～17世紀初頭

口径51.2cm 高さ9.5cm 底径28.2cm

腰に段をつけ、口縁は広い鐔状に作る。見込みに蓮池水禽文を描き、周縁部は八方割に窓を配し、窓内に宝文と花卉文を交互に入れる。明末の景德鎮民窯で盛んに焼かれ、日本はもちろん、東南アジアやヨーロッパまで輸出された。またトルコのトプカプ宮殿に類似の芙蓉手皿が多数所蔵されていることもよく知られている。

特別企画展のお知らせ

特別企画・世界・森の博覧会プレイベント

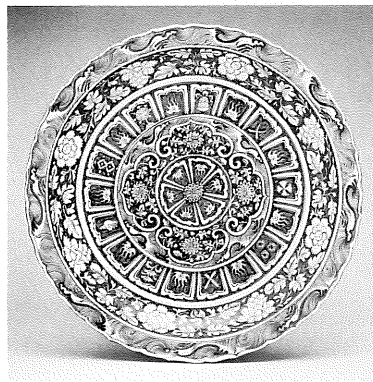
「トプカプ宮殿の名品」展

—スルタンの愛した陶磁器—

○主旨

トルコ共和国イスタンブール所在のトプカプ宮殿博物館の東洋陶磁は、オスマン・トルコ帝国の歴代の王（スルタン）が収集したものであり、現存する最大最古のコレクションである。

その14世紀から19世紀に至るコレクションのうち、元・明・清の中国陶磁と有田磁器を出品することによって、各時期の王侯貴族が求めた最高の陶磁器が何であったか、そしてその中に占める有田磁器の位置を紹介することによって、わが国とトルコ共和国の国際親善と文化交流を促進する。



青花八宝花卉文菱花大皿
元（14世紀中葉）口径46.0cm

- 主催 佐賀県立九州陶磁文化館
滋賀県立陶芸の森（滋賀会場のみ）
毎日新聞社（東京会場のみ）

○後援（予定） 外務省、文化庁、国際交流基金

○会場・会期

佐賀会場

平成7年9月8日（金）～10月15日（日）

佐賀県立九州陶磁文化館

滋賀会場

平成7年10月21日（土）～11月19日（日）

滋賀県立陶芸の森

佐賀会場

平成7年11月26日（日）～12月24日（日）

古代オリエント博物館

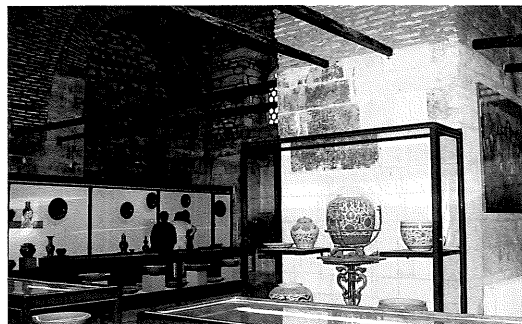
○休館日 会期中の毎月曜日

○展示構成

中国の陶磁器（ベトナム陶磁を含む）	61点
有田の陶磁器	46点
合計	107点



青花蓮花唐草文筆箱
明（15世紀末～16世紀初）長27.5cm



トプカプ宮殿の陶磁展示室風景

○図録 展示作品の図録を刊行する。

特別企画展のお知らせ

世界・森の博覧会プレイベント

九州北部三県文化交流展

柴田コレクション展 パートⅣ

—古伊万里様式の成立と展開—

○主旨

この展覧会は、福岡・佐賀・長崎三県の文化の向上と連帯を深めるとともに他県への文化の紹介を目的として企画されたものである。今回は平成8年に佐賀県で開催される「世界・森の博覧会」のプレイベントとして、柴田明彦・祐子夫妻によって新たに寄贈された江戸時代の有田磁器を紹介する。有田磁器の美は柴田夫妻のコレクションによって既に広く知られているが、今度の新寄贈品は17世紀末に現れる古伊万里様式の成立とその展開に焦点を絞った画期的な内容である。世界・森の博覧会へむけて、現在の有田焼の基礎となった古伊万里様式の特徴を再認識する展覧会となる。

○主催 佐賀県教育委員会、佐賀県立九州陶磁文化館

○共催 福岡県立美術館、長崎県立美術博物館

○会場・会期

佐賀県立九州陶磁文化館

平成7年10月21日（土）～11月26日（日）

（月曜休館）

福岡県立美術館

平成7年12月8日（金）～12月24日（日）

（月曜休館）

長崎県立美術博物館

平成8年1月14日（日）～1月28日（日）

（月曜休館、ただし1月15日は開館し、16日に休館）

○展示内容

江戸時代の有田磁器約 500件1400点

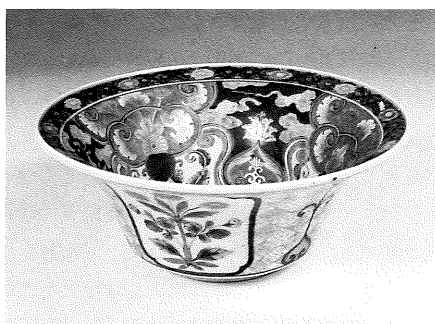
皿、鉢、碗、猪口、蓋物、瓶、壺、盃洗など

○図録

展示作品の図録を刊行する。



色絵菊丸並文皿 有田 1690～1710年代



色絵唐花雲文朝顔形鉢 有田 1690～1710年代



染付岩花鳥文輪花皿 有田 1780～1810年代



染付竹林七賢人文蓋物 有田 1810～1840年代

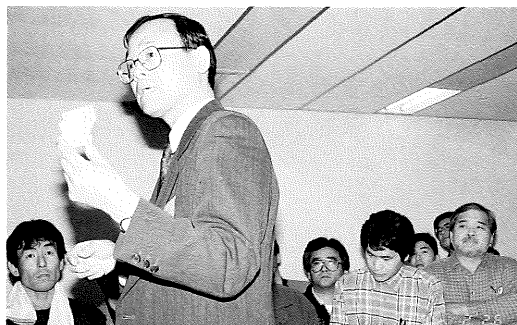
行事・展覧会報告

第5回 九州近世陶磁研究会

平成7年2月25日～26日に、第5回九州近世陶磁研究会が開催されました。同研究会は、平成2年12月に第1回の研究会が開かれ、九州の近世陶磁の情報交換および共同研究の場として、毎年開催してきました。毎回、九州の近世陶磁についてテーマを設け、生産地の九州の研究者や文化財担当者、また消費地である東京や関西の研究者などによる研究発表や討論会を行いました。

今回の研究会は、テーマを「寛永以降の唐津焼」とし、生産地である肥前地区の唐津焼の古窯跡について研究発表および事例報告が行われ、消費地側の研究者との相互認識をはかり、かつ両者を交えて検討することとしました。まず2月25日には記念講演として東中川忠美先生（佐賀県立名護屋城博物館）により「肥前の甕の変遷」と題して、17世紀前半から19世紀に至る甕の変遷を、大甕を中心に発表していただきました。また、日韓の甕作りの比較資料として、佐賀県東松浦郡相知町横枕の故藤田勇氏の工房を映したビデオ「横枕のかめ作り」と韓国慶尚北道蔚州郡温州面南倉の甕作りのビデオ「韓国南倉の甕作り」を鑑賞しました。さらに今回のテーマを概説する意味で、大橋康二（九州陶磁文化館学芸課長）による「寛永以降の唐津焼の変遷」が発表されました。26日は、肥前の陶器窯の発掘調査報告を中心に研究発表が行われました。家田淳一氏（佐賀県教育委員会）による「甕屋谷窯跡・内野山北窯跡」の発表をはじめ、原田保則氏（武雄市教育委員会）「武雄市の陶器窯跡」、船井向洋氏（伊万里市教育委員会）「伊万里市内における寛永以降の陶器窯跡について」、中野雄二氏（波佐見町教育委員会）「下稗木場窯跡・鳥越窯跡」、稲富裕和氏（大村市教育委員会）「土井の浦窯跡」、扇浦正義氏（長崎市教育委員会）「現川窯跡」が行われました。また、発表の参考資料として各窯跡から出土した唐津焼の陶片資料（一部、消費地遺跡出土の陶磁片を含む）が多数持参され、各発表の間や昼休みには会員の皆さんが熱心に見入っていました。

なお、発表に先立って行われた総会で、会の名称変更の提案についての審議があり、賛成多数で変更が認められ、次回から会の名称を「九州近世陶磁学会」とすることになりました。



出土遺物の検討会で説明する大橋学芸課長

陶芸文化講座

平成7年3月18日に、当館講堂において陶芸文化講座を開催いたしました。チェコ共和国のナールステク国立博物館・学芸課長・フィリップ・スホメル先生に「西洋からみた東洋のファンタジー—チェコのやきもののオリエンタリズム—」と題して講演をしていただきました。スホメル氏は浮世絵や陶磁器、漆器など江戸時代の日本美術を多数収蔵していることで知られるナールステク国立博物館で陶磁器を中心に研究しており、現在、国際交流基金の援助で九州陶磁文化館で肥前磁器について研修しています。今回は、日本ではあまり知られていないチェコの陶磁器についてスライドを交えて約2時間、話をされ、窯業関係者や一般の方々が熱心に聴講されました。



講演会風景

第6回九州陶磁器 デザイナー協会展

平成7年2月21日から2月26日まで第1展示室において、第6回九州陶磁器デザイナー協会展が開催されました。毎回、テーマを設けて会員が作品の提案を行ってきました。今回のテーマは「盛る」で、会員がデザインした皿や鉢、カップ、花器など盛るための器が展示されました。おのおの盛るという行為のために、器のサイズや形態が考慮され、また組合せのバリエーションを考案するなど多様な造形が提示され、なかにはコンピューター・グラフィクスによる作品展開の展示パネルもあり、訪れた人々もしきりに作品に見入っていました。



展示風景

第6回 伊万里陶青会展

平成7年3月1日から3月5日まで、第1展示室において、第6回伊万里陶青会展が開催されました。今回のテーマは「花と器の出会い」と題して、メンバーによる“洋の花器”、“和の花器”、“茶花の花器”の提案がなされました。展覧会では、草月流佐賀支部（和花）、専正池坊ロイヤルフラワーアレンジメント（洋花）、東山文化協会（茶花）の協力で、実際に花器に花が生けられ、より身近な展示となり大いに人々の関心を買っていました。

また、3月5日には、関連催事として「暮らしの中に花心」と題したシンポジウムが催され、さらにフラ

ワーアレンジメントや茶花についての抗議や実技講座も開催され、展覧会とともに高い関心が寄せられました。



展示風景

第6回有田窯業大学校 卒業制作展

平成7年3月7日から3月12日まで、第1展示室、展示ホールおよびエントランス・ホールにおいて、第9回佐賀県立有田窯業大学校卒業制作展が開催されました。本科生と研究科生の作った食器セットやティーセットといったテーブル・ウェアから照明器具や陶板による壁面構成、オブジェにいたる種々の作品が展示され、観覧者の大きな関心を買っていました。また、展示ホールおよびエントランス・ホールには短期研修の下絵付、上絵付、ろくろの各研修生の作品、さらに交流出品として石川県立九谷焼技術研修所、多治見市陶磁器意匠研究所の研修生の作品も展示され、こちらの方も熱心に見入っていました。



展示風景

ナーブルステク国立博物館とチェコの日本美術品

フィリップ・スホメル（ナーブルステク国立博物館学芸課長）

ナーブルステク国立博物館は、チェコ共和国内で日本の美術品、工芸品、民芸品を所蔵している最も大きなコレクションで、およそ19,000点の作品より成り立っている。他の多くのヨーロッパの博物館と同様に、ナーブルステク博物館は19世紀後半に設立された。創立者ヴォイタ・ナーブルステク(1826-1894)は、チェコの政治家であり、プラハの文化ならびに社交界の重要人物で、1863年に初めて日本のものを入手したといわれる。彼は日本美術品と工芸品を主にプラハあるいはチェコの隣国のドイツ、オーストリアなどで購入した。また、他の寄贈者達の中に日本の美術品をチェコ国内もしくは外国の店で購入した政治家、芸術家、美術愛好家、作家も多くいた。その中で、おそらく最も重要な日本美術のコレクターはヨエ・ホロウハ(1881-1957)という作家であり、ナーブルステク博物館にある日本美術品の大多数は彼のコレクションからなっている。

ナーブルステク国立博物館のコレクションの大部分は6,700点になろうとする日本の木版画であるが、また、保存されている陶磁器も少なくない。約1,600点から成る陶磁器のコレクションは、肥前の輸出磁器・京焼・瀬戸・薩摩などであるが、大多数は19世紀のものである。100点程にのぼる古伊万里の場合、18世紀前半の染錦手の作品が一番多いが、17世紀後半の柿右衛門様式の色絵、白磁、染付の磁器も少しある。18世紀末から明治期にかけて作られた日本国内向けのものがほとんど含まれていないのも特徴の一つである。

プラハにはもう一つ重要な東洋美術のコレクションがプラハ国立美術館にある。この国立美術館のコレクションの場合、肥前の染付や色絵、鍋島、唐津などの作例が含まれている。これらのコレクションのほかにボヘミアやモラヴィアの貴族の宮殿などにも面白いコレクションが保存されている。

1996年にチェコに保存されている重要な東洋磁器のコレクションを集めた大きな展覧会が行われることになっている。そのために私は国際交流基金の援助を得て、この九州陶磁文化館で日本から輸出された磁器に

ついて、研究をしています。

フィリップ・スホメル Filip Suchomel

1966年 チェコスロバキア、フラハ市（現在チェコ共和国）に生まれる

1984-1991年 カレル大学で日本学、東洋学、美術史専攻

1989-1990年 プラハ国立美術館で研修

1990-1993年 ナーブルステク国立博物館に学芸員として勤務

1994年から 同博物館の学芸課長

1994年9月-1995年6月 国際交流基金フェローシップとして九州陶磁文化館に留学

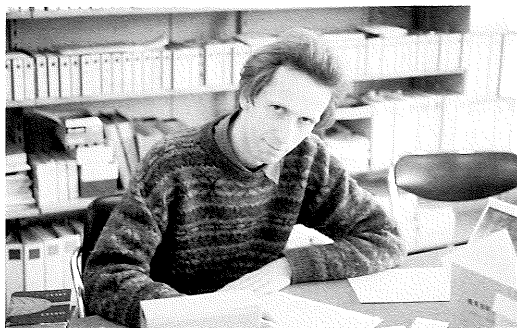
1991年から チェコ日本友好協会委員会の委員

1992年から “侘寂美” クラブ（日本美術友好協会委員会）の委員

1992年 Japonský Porcelán, Praha 1992（チェコ・コレクションに保存されている日本の磁器についての論文）

1994年 Die flüchtige welt des japanischen holzschnittes, Cheb 1994（浮世絵についての論文）

1994年 ナーブルステク博物館所蔵-日本美術品図録 京都（ナーブルステク博物館に保存されている日本のコレクションについての論文）



研究中のスホメル氏

シリーズ

やきものにみる文様 (28)

しばたば

しばがき

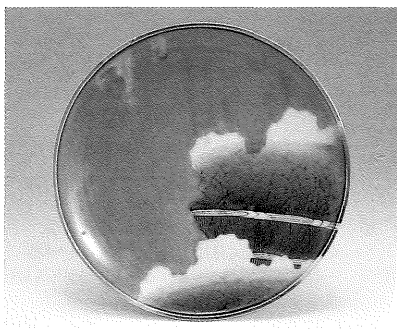
柴束文様・柴垣文様

野山の雑木は切り揃えられて「柴」となり、壁、垣根、屋根などの建材として用いられるほか、薪として火にくべられるなど、かつての日本の生活にはなじみの深いものであった。

刈った柴を束ねた「柴束文」は、しばしば梅などの花がさしてあるのがおきまりの文様構成で、中国磁器には見られない和様の文様である。マイセン磁器工房では柿右衛門様式のこうした花付きの柴束文を取り入れており、1740年頃の皿でポーランド・ザクセンの複合紋章を主文様とし、周りに柴束文を散らした和と洋の文様を組み合わせた例が知られる。

柴垣は田舎屋のしつらえとして一般的のものであり、古くから文学や絵巻などに登場する。古伊万里の文様としては、花をつけた樹木の根元や屋敷の周りの囲みとして描かれる。とりわけ樹木、樹木に停る鳥、草花とともに描かれている例が多く、木、花、鳥の種類を変えて組み合わせ、何とおりのパターンをつくる応用のきく文様モチーフである。柴垣が独立した文様として描かれる例は少ないが、古伊万里には図のように雪を被った柴垣のみで構成されているものが存在する。冬の情景の点景として雪持柴垣は浮世絵や絵巻などに描かれるが、明暦期（1655～1658）頃には「柴垣柴垣柴垣越して雪のふり袖ちらとみた」という柴垣節に合わせて踊る柴垣踊が流行したということから、この柴と雪の組み合わせは、あるいは約束ごとであったかもしれない。

(永渕友子)



染付雪持柴垣文皿
有田 1660～80年代 館蔵（柴田夫妻コレクション蔵）

シリーズ

やきものの技法 (28)

ひび焼 ②

釉薬の貫入を装飾的な効果として意図的に利用したのがひび焼であるが、ひび焼の字は罅、胼、皸、などが用いられた。

意図的に生じさせたひびは、焼成後に黒色の顔料をしみ込ませて、ひびの文様を強調したと考えられる。あるいは永い年月の間に自然とシミが生じた場合もあるが、その区別は厳密ではない。

有田の『皿山代官旧記覚書』の天明7年（1787）の項に、蓮池藩領である志田皿山（佐賀県藤津郡塩田町）で、「大川内胼焼同然焼立商売仕候」とある。鍋島本藩の御用窯である鍋島藩窯と同じようなひび焼の製品を作り、それを勝手に販売しているのでやめるように指示した一件である。この記録から天明ごろに鍋島藩窯でひび焼の作品が独占的に作られていたと考えられる。藩窯の出土陶片には陶胎染付の製品がいくらか見られる。しかし藩窯の物原からの出土陶片は、登窯の共同利用を許可されていた「お手伝い窯焼」と称する窯元たちの製品も混入しているため、ひび焼の出土陶片をすべて鍋島と考えるのは注意を要する。



染付楼閣山水文皿
白石 19世紀後半
館蔵

鍋島藩窯のひび焼を模造する事例は、白石鍋島家領の白石焼（佐賀県三養基郡北茂安町）においてもみられる。白石焼は18世紀に始まり、文化3年（1806）には、大川内の陶工藤崎百十が白石へ移り、「白罅焼」を始めたとされる。白石のひび焼は江戸後期から明治期の伝世品が多く残されている。写真の大皿は白石のひび焼の代表的なものであり、灰白色の地肌全体にひびがはいり、染付で山水文が描かれている。化粧土を掛けているため、口縁部が虫喰い状にかけやすいのもひび焼きの特色である。

(鈴田由紀夫)

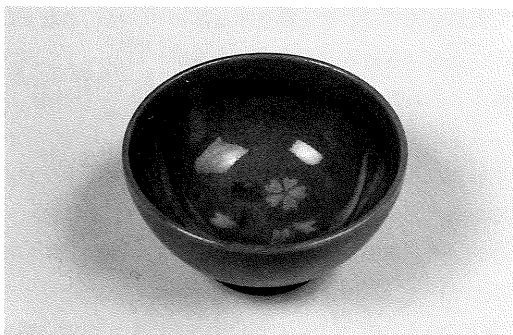
陶磁資料寄贈者芳名（敬称略）

〔平成6年4月1日～7年3月31日〕

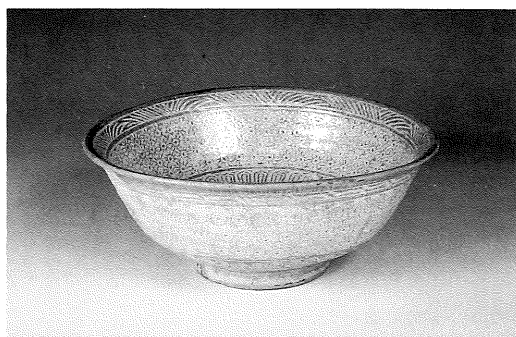
九州陶磁文化館に資料をご寄贈いただきましてありがとうございます。ご寄贈いただきました資料は、永く保存すると共に、研究・展示等に供したいと存じます。今後とも、ご協力をお願い申し上げます。

ご寄贈いただきました資料のうち、溝上元良氏から寄贈されました資料につきましては、平成6年9月6日～18日に「溝上コレクション展」として紹介いたしました。また、柴田明彦・祐子ご夫妻から寄贈された資料は平成7年10月21日～11月26日まで「柴田コレクション展（Ⅳ）」として紹介いたします予定です。なお、それらを除く資料については新収蔵品展（平成7年5月24日～6月5日）に展示し、広く県民の皆様にご高覧いただく予定です。

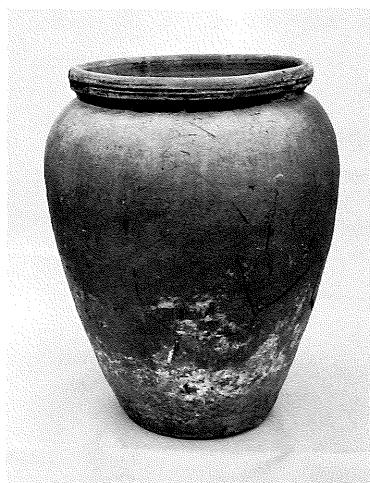
溝上元良	大阪府	陰刻点文碗 など 計50点
石田重晴	熊本県	象嵌桜花文小杯、 象嵌桜花文小杯、 象嵌桜花文碗蓋、 象嵌蘭文碗蓋
梶木光三	兵庫県	褐釉大甕 など 計59点
柴田明彦	神奈川県	染付山水魚唐草文輪花皿
柴田祐子		など 計 457点
竹田礎智夫	長崎県	染付七福神文酒器揃、 色絵松竹梅龍文三足燭台



象嵌花文碗 韓国 15世紀 溝上氏贈



象嵌桜花文小杯 八代焼 19世紀 石田氏贈



大甕 備前 16世紀後半 梶木氏贈



染付七福神文酒器揃 有田 19世紀 竹田氏贈

利 用 案 内

開 館	午前9時～午後4時30分 月曜休館 年末年始（12月28日～1月4日）休館
観覧料	一般200円（150円）／大学生150円（100円） 小・中・高校生は無料。 （ ）内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、料金が変わります。
交 通	J R 西日本佐世保線有田駅下車 徒歩10分